

「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」（九州・沖縄ブロック）

参加者からの質問に対する発表者からの回答

1 霧島おむすび自然学校（発表者：壹岐 博彦 氏）

	質問	発表者からの回答
1	<p>壹岐様、素晴らしい活動と発表をいただきありがとうございます。質問ですが、危険予知能力を引き出すための指導方法を具体的にご教示いただけると幸いです。</p>	<p>危険箇所を知らせるため、わざと声の大きさや調子を変えることはしています。危険を伴うような所での行動（体験）は、初めは手を引きながら、ときどき手を離して本人だけにさせてみて、本人のもつ危険に対する認知度、理解度をみるようにしています。少しでも危険に対する感覚があれば、支援する側は声かけや励ましをする程度で、極力援助を少なくして、本人の力を引き出すような対応をとっています。危険な所の気付き、切り抜ける力を少しでもつけることをねらっていることです。ただし支援する側は常に危険なところ、危ない行動をとるときには、いざというときはすぐに、手を貸したり援助したりができる準備はしています。目を離さないことにも気を付けています。</p>
2	<p>様々な活動の中で、障がいのある子ども同士での「関わりと変化」（相互作用のようなもの）があれば教えてください。</p>	<p>リピーターになっている人たちに多いですが、毎回会っているうちに、どちらからともなく声をかけ合っていることがあります。〇〇君と名前を呼んだり笑顔で顔をのぞいたりしているのを見ます。参加者の一人がやっている遊びを見て、自分も真似して挑戦するということときどき起こります。参加者の行動がやる気を引き出すという事例です。参加者はマイペースの人たちが多く、同じタイミングで同じことをすることはめったにないことですが、気になる相手の側に行ったり、行動を真似したり、時には後をついて体験することがあります。</p>
3	<p>霧島おむすび自然学校の素晴らしい体験活動の発表ありがとうございました。体験活動の実施には多くのボランティアの確保が必要だと考えます。発表の中で家族の参加も多く見られましたが、ボランティアはどのように募集しているのでしょうか。また、ボランティア確保について連携している団体・機関等があれば教えていただけませんか。</p>	<p>ボランティアの募集は特に行っていません。ボランティアとして協力いただいているのは、自分とつながりのある野外活動好きの支援学校の教師や知人たちです。また別な団体の体験を手伝ったときに会った人に声をかけることもあります。参加いただく保護者を通じて野外活動に興味がある方を紹介いただくこともあります。発表でも伝えたかと思いますが、保護者にも一協力者になってもらうこともあります。もう一つ、ボランティア確保で連携している団体や機関等は特にありません。連携まではないですが、団体にかかわる人とのつながりができればと思うところです。</p>

	質問	発表者からの回答
4	<p>20年以上の継続した自然体験の企画・運営に頭が下がります。質問です。ボランティアの協力を得たとしても、様々な道具、保険、準備には費用がかかると思います。企画の運営費や壹岐先生に対するギャランティ等の確保はどのようにされていますか？支援者や事業運営者がボランティアということだけでなく、壹岐先生の取組のような例が仕事となっていくことで、生涯学習の機会を広く作っていけると考えるものですか。</p>	<p>様々な必要経費は、参加者からの参加費で賄うことにしていますが、実際は体験にかかる材料費や保険料等の一部に充てられるだけで、スタッフへの謝金や交通費、指導料までは出せていません。必要費用を確保するため、参加費を上げるという手はありますが、家族の負担を考えると難しいと考えています。ボランティア的な運営と言えます。少しですが自助努力として、助成金を申請し必要な物品購入やスタッフの謝金確保に努めてはいます。事業全体に使える助成金・補助金等も活用できるのですが、当団体は対象外になりそうです。今回の国の事業が、障がいのある人たちの生涯にわたる学びを支援する担い手確保と体制づくりまでを見通すのであれば、何らかの支援策があるとよいと思います。そのことで必要な担い手となる人材や団体等が積極的に協力したり活躍できる場が広がったりできるように思います。</p>
5	<p>体験活動の実施には多くのボランティアさんの確保が必要ですが、確保に工夫がありますか。</p>	<p>質問者3の方への回答以外でお答えするとすれば、工夫ではないですが、ボランティアに参加いただく方は、野外活動が大好き、自分でも趣味で楽しんでいる、さらに障がい者とふれあいたい（障がい者と関わった経験がある、福祉に携わっているなどを含めて）、そういう人を求めています。</p>
6	<p>参加者が、毎回楽しみにしているとの感想がありましたが、参加者の声を受けて始めた事業やプログラムの工夫などがありましたら、ご紹介ください。</p>	<p>発表でもご紹介したバウムクーヘンづくりを始めたのがきっかけで、ピザづくりが家族の要望から生まれました。いずれの活動もウォーキングを取り入れています。心地よい汗をかいてお腹も空く、調理への意欲も高まる、ということをおねらったことです。家庭では安全面を考えてなかなか体験させられないという親の思いを受け、援助があればできそう、一人でさせてみようという、個々に応じた挑戦をしてもらっています。</p>
7	<p>自然体験学習の展開は障がいのある方の学びだけでなく、支援者の方々の学びも多くあるのではないかと考えたところです。支援者の方からの学びに関する声等があれば聞かせてください。また、今後のよう</p>	<p>支援者からの声で一番多く聞かれるのが、障がいのある人たちの（想像以上の）持っている力に気付かされるということです。手を貸すこと、支援することを前提に考えていた予想やイメージ、ある意味思い込みをくずされる、という声です。また本人が支援を受けずに自分で体験に向き合う姿に接して、支援者側がいかに障がいのある人たち一人一人の力を見極めるか、支援者としての心構え、接し方を学ばせてもらっているという声も聞きました。展望については、一つは行政や関係団体等と協働で事業を行えないかと考えています。生涯学習に関する講座等で体験部門の講師を担ったり、思いを同じにする別な団体と協力して広域で事業を行ったりできればと思っています。</p>

	質問	発表者からの回答
8	<p>今年度は新型コロナウイルスが流行していましたが、どのような対策をして野外活動をしていたのでしょうか？これからの活動のときに参考にしたいので教えていただけると助かります。</p>	<p>一つは詳しい計画書の中に、コロナ感染防止のための取組と協力いただくことを提示しました。例えば、検温（自宅から、当日朝の受付時）や活動中の健康観察、手洗いの励行、消毒の徹底、マスク着用、身体的距離をとることなどです。当日はその場その場で声かけや指示をして、意識を持たせる、行動を促すようにしました。またカヤックなど使う道具や用品など人が触れるものを消毒液で拭いたり、新しい物に変えたりしました（やむを得ず使い捨て食器も使用したことも）。消毒に関しては自分たちの意識の問題もあるかと思いますが、ここまですればよい、という判断は難しいと感じました。体験時の参加者は結構（こちらから働きかけなくても）意識した行動をとっていました。体験を担う側がいかに危機意識を持って体験に臨むかで必要な対策が出てくるように思います。またできる対策には限界があるので、自分たちに最低限できることを徹底して行うことだとも思いました。</p>

2 株式会社グローバル・クリーン（発表者：税田 和久 氏）

	質問	発表者からの回答
1	<p>フォーラム等を実施されるなど地域を巻き込んだ取組をされていますが、地域において同じような取組の増加や協力者の増加など、波及効果を教えてください。</p>	<p>障害者雇用を創業時(21年前)から行っていましたが、自社が良くてもお客様に理解してもらえないと一緒に働くことができない現実にはぶつかりました。そこで、障がい者が安心して働ける地域社会にしたいとご賛同して頂ける市議会議員の皆さんと福祉のまちづくりフォーラムの実行委員会を立ち上げました。今年度で7年目になりましたが、最初から多くの皆さんにご参加いただいている訳ではございません。毎回、参加者の集客には苦勞しますが、参加人数が減っても継続し発信することが大切だという思いで開催しています。</p>
2	<p>発達障がいなど、仕事以外の時間の過ごし方が課題の場合があると聞きます。余暇や休憩時間の工夫などされていますでしょうか。また、離職とかあったりするのでしょうか。</p>	<p>仕事中は障がい特性に配慮しながら進めていきますが、休憩時間や休日のときは、特に工夫していません。弊社は、一般就労として採用していますので、一般社員と待遇や賃金等も同じですので、一社会人として接しています。お昼ご飯を、できる限り一緒に食べるようにしているくらいです。他社さんより仕事以外のイベント（部活動、慰安旅行、歩こう会等）もたくさんあります。離職に関しては、過去に聴覚障害の方が体調不良にて退職された方が1名います。</p>
3	<p>障がいのある方のサポート面でご助言いただければありがたいです。</p>	<p>仕事上では配慮しますが、それ以外のことでは、基本的に特別扱いはしていません。社会人として、スキルアップやビジネスマナーも含め、社員教育をしていきます。厳しいことも遠慮なく伝えています。甘やかすことはしません。頑張ってくれたり、良い仕事をしたりしたときは褒めています。さらに全社員対象の360度評価シートを毎月行っていますので、毎月、全員から評価されて、スキルアップや人間的成長にもつなげるようにしています。一般社員さんと同じように接するようにしています。</p>
4	<p>税田様、素晴らしい発表ありがとうございました。私の娘はダウン症で、発達の遅れがあります。保護者として一番の心配事は、将来自立できるのかという点です。その点でいきますと「プロ」を育成するという御社の取り組みに勇気をいただきました。ありがとうございました。</p>	<p>こちらこそ、ご参加ありがとうございました。私の知り合いで、京都でプロフェッショナルの清掃をしている福祉サービス事業所さんがあり、そこにダウン症の利用者さんがいるそうです。この方は、50歳を過ぎても毎日生き生きとお仕事をされており、寿命が伸びているとおっしゃっていました。実際に私も見学にお邪魔した際にも私たちにご案内説明を楽しそうにしてくれました。プロのお掃除でお客様のお役に立っていることをこちらでも実感しました。</p>
	<p>工賃アップは、純粋に社員の仕事に対するモチベーションアップにもつながっているのではないかと思います。実際の皆さんの反応はいかがでしょう。</p>	<p>昨年、弊社に入社してくれたスタッフさんは、施設にいる時よりお給料が5倍になりましたと喜んでいました。私が指導しているB型事業所の利用者さんも工賃アップにはすごく喜んでくれます。休むことも減ったと支援員さんからも聞いています。</p> <p>昨年ですが、嬉しいお話を聞きました。対人恐怖症の利用者さんが市役所のトイレ清掃に初めて参加しました。今まで施設から出たことなく、内職のお仕事しかしなかった方がそれから施設外でのトイレ清掃に行けるようになったとのこと。すごく感動しました。</p>

	質問	発表者からの回答
6	<p>障がい者を雇用する上で、採用の決め手、どういったところを重視して採用をされているかを教えてください。</p>	<p>採用の決め手は、チャレンジ精神を持って、成長したいと思いながら仕事に取り組めるかです。社会の一員となるには、人の役に立つ気持ち大切です。その意識を持てる方を採用しています。意外に障がい者は、小さいころから甘やかされて育っているケースもありますので、その甘えから脱却しなければ、自立できませんので、成長意欲を大切にしています。障がい者本人ではなく家族が甘やかす場合にも親御さんに注意する場合があります。一人でも生きていける力をつけさせたいのですと、理解してもらっています。</p>
7	<p>「本気の障がい者支援での仕事づくり」という言葉が印象強く残っています。たいへん素晴らしい発表ありがとうございます。2点質問させていただきます。</p> <p>1点目です。フォーラムやシンポジウム等を実施され、地域等を巻き込んだ取組を進めておられますが、同じような取組の増加や協力者の増加等、地域社会への広がりほどの現状でしょうか。税田社長の感じていること等も含めてお聞かせください。</p> <p>2点目です。発表の中で、給与に関することもあったのですが、給与の管理や使い方といった面でも課題等が出てくるのではないかと考えますが、社内教育等で金銭教育等にも取り組まれていることがありますか。</p>	<p>1点目：正直、地域への広がりはまだまだです。逆に県外からの参加が多くなってきています。今年度は日向市長にもご登壇していただき、地域への発信を広げていく予定です。福祉関係や障がい者支援の方々の参加が残念ながら少ないのが寂しいです。実は、そこに課題を感じています。</p> <p>2点目；給与や賃金体系も一般社員と同じですので、一般の新入社員よりも高い場合もあります。管理の方法や使い方の指導などは特にしていませんが、無駄使いしないようには口頭で話しているくらいです。その他、すべての社員さん向けのファイナンシャルプランナーさんの研修会を開催したり、銀行さんの投資の勉強会も社員さん主導で開催したりしています。</p>

3 長崎大学医学部保健学科（発表者：田中 悟郎 氏、片岡 史和 氏、富永 遼子 氏）

	質問	発表者からの回答
1	<p>リハビリカレッジをやりたいと「夢」になったきっかけを教えてください。</p>	<p>すでに知識として「リハビリカレッジ」の存在として知っていたこと、それが仲間（悟郎先生）の夢だということを知り、応援したいと思ったからです。行動して理解するうちに、「治療」ではなく「学び」というスタンスが共感できるようになり、自らもその考えを広めたいと望むようになりました。 【回答：片岡氏】</p> <p>最初のキックオフシンポジウムのシンポジスト佐々木 理恵さんが生き生きとリハビリカレッジのよさを話されていて 元気をもらえました。「セルフスティグマをなくすことができる」というのも大きいです。セルフスティグマにとらわれて動けない人は、多いと思います。完全にはなくすことができなくても小さくすることはできと思っています。 【回答：富永氏】</p> <p>ピアサポートみなとの学びがあり、まず、みなとの仲間に相談しました。「やりたい」、「やろう」、という声を多数いただき、みんなで挑戦することになりました。 【回答：田中氏】</p>
2	<p>素晴らしい取組でこの取組が広がっていくことを期待します。今後どのようにこの取組を広げていこうとお考えですか？構想でも結構です。</p>	<p>やはり、スライドでも話したとおり、大村市でもこのリハビリカレッジを開きたいですね。そして、障がい者だけじゃなくて、一般の人学べる場へと成長させていきたいですね。私たちの活動でも、障がいを持たない方も参加していたのですが、最後の方では、フランクになって区別する必要がないように感じていました。今後は、この取組を担える人材を育てたいです。ピアサポーターを増やすことが最終的に、この取組の普及につながると思います。 【回答：片岡氏】</p> <p>長崎市でリハビリカレッジが成功したら、大村でもできるようにしたいです。今度は長崎市で育ったピアサポーターが大村市に来るようになるとか、大村と長崎の人が交流できたら最高に嬉しいです。そのときは新しい生活様式だったり画面越しだったりするかもしれませんが、それでも交流できたら嬉しいです。個人的には、他の地域のリハビリカレッジも視察できたらいいなあと思っています。 【回答：富永氏】</p> <p>長崎市及び NPO 法人のぞみ共同作業所と協議中です。具体的な事が明確になり次第、ホームページ上で公表する予定です。 【回答：田中氏】</p>

	質問	発表者からの回答
3	<p>ピアサポーターのネットワークを、今後どのような手段で構築し、広げて行きたいとお考えでしょうか。アイデアがあればお聞かせください。</p>	<p>すでに私は「ピアサポートみなと」「おおむら麦の会」などのピアサポートグループに関わっています。それを知ってもらう場を増やしたいですね。具体的にはとインターネット上での「オンライン交流会」や「ピアサポートの勉強会」の展開を進めているところです。同時に、会の主な活動であるリアルな対面での語り合いの場も守っていこうと考えています。 【回答：片岡氏】</p> <p>コロナ禍で直接集まれないからこそできるネットワークがあると思います。Facebook や LINE などの SNS では物理的に遠くの人ともつながれますよね。ただ対面とは違った部分で気をつけないといけない部分はあると思います。SNS を使ったネットワークではある程度のルールを作らないといけないと思います。対面では、ピアサポーター同士での勉強会などを開いて知識を共有できたらと思います。一緒においしいものを食べると打ち解けられますし。それも SNS などで周知できたらいいと思います。長崎の当事者団体、協力してくれないかな…。なんて。 【回答：富永氏】</p>
4	<p>グループワークでは具体的にどのようなテーマで話し合いをするのでしょうか。</p>	<p>WRAP のプランや、コミュニケーションのコツや工夫、自分の得意なことや苦手なことについて、などをテーマで話しましたね。付箋に問題点を挙げていったのち、それを貼り直しまとめて、対処法を考えていきました。一方で、対処法をあげたのちに、その体験談を語り合うグループワークをしたりした人もいたようです。 【回答：片岡氏】</p> <p>「ストレス」や「自分の苦手なこと・もの」「得意なこと」「元気になるために」などについて話し合いました。付箋と模造紙を使って意見を出していきます。例えば何がストレスになるのか、それを解決や回避する方法などをグループ内で話しながら出したり、それぞれの出した意見の似たものを模造紙の上でグループ分けをしたりして、視覚的にもまとめていきます。 【回答：富永氏】</p> <p>本事業のホームページに各年度の報告書を掲載しています。その中のグループワークの資料をご覧くださいましたら幸いです。 http://www2.am.nagasaki-u.ac.jp/jissen-kenkyu/index.html 【回答：田中氏】</p>
5	<p>新たな夢を語っていただいた中に「学び、支え合うネットワーク」を作りたいということがあったのですが、どのようなネットワークにしたいか。もう少し片岡さんの夢についてお聞かせいただきたいことと、共生する社会を作り上げていく上で大切だと感じていることを教えていただけたらと思います。</p>	<p>ハンディキャップや障がいを超えた、一般の方も参加できる学びのネットワークを作りたいです。日頃は、「職員」「利用者」などの区別はされていても、この学びの場では、どんな人も「等身大のひとりの人間」として対等な、そんな場ですね。共生社会を作り上げていく上で大切なことは、ハンデの有無を問わず、一方だけを「サービスの消費者」に留めないことだと思います。社会の一員である以上、提供することと受け取るとは同時にセットであるべきで、そこがアンバランスにならないことが大切だと思います。 【回答：片岡氏】</p>

4 福岡市手をつなぐ育成会保護者会（発表者：米倉裕子氏、下山いわ子氏）

	質問	発表者からの回答
1	<p>「疑似体験」の発表は勉強になりました。プレゼン資料はダウンロードできないのでしょうか。</p>	<p>概要資料は、宮崎県へ送付しています。他にもプログラムがあります。宜しければ下記までお問い合わせください。</p> <p>おひとりの参加者から、どこへでも出向きます(^_^)</p> <p>福岡市手をつなぐ育成会保護者会 電話 092-713-1480 E-mail : hogsha@fiku.jp 担当 下山</p> <p>※資料はホームページからダウンロードできます。（宮崎県事務局）</p>
2	<p>MLAP を通じて感じられた「障がいとともにある人の気持ちと行動の変化」、「障がいがない人の気持ちと行動の変化」の具体的なお話があれば聞かせてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいのある人 <p>知的障がいのある方が急に視覚機能が低下し、生活にも活気がなくなり、車いすを使用するまでになっていたが、MLAPに参加すると、自ら立ち上がり、楽器を鳴らしたり、歌われたりされた。最後は、「楽しい」と号泣された。</p> ・継続して参加された視覚障がいのある方 <p>1回目は「なぜ参加しないといけないのか」と不満げだったが、2回目は顔を上げて参加され、3回目は「楽しい！次はいつ？」と話しかけてくださった。</p> ・知的障がいのある方 <p>福祉事業所で体験後、地域での MLAP 体験会があると知り、自ら場所を調べ、交通機関を調べて、地域での MLAP に参加され、生き生きと活動された。</p> ・保護者の方から <p>いつも“ご迷惑をおかけして申し訳ありません”と言いながら行事に参加しているけれど、MLAP の催しは、気兼ねなく参加できて楽しく、楽しい中に、人との関わり方を学ぶ機会にもなっている。今は、親が車で連れて行けるので、どうにか参加できている。もっと身近なところで開催してもらえると、継続して参加できるのに。</p> ・福祉事業所の職員の方から <p>MLAP の活動で生き生きとした利用者のみなさんの様子を見て、支援の仕方を再考した。</p> ・高齢者事業所の職員の方から <p>障がい者だけではなく、高齢者もとても楽しめた。楽しそうな利用者のみなさんの様子を見てうれしくなった。</p> ・学生ボランティアの方から <p>最初は、正直に言って障がい者が怖かった。でも、一緒に参加していくうちに、僕と変わらないんだ、と気づいて、一緒にいて楽しかった。</p> ・地域の参加者の方から <p>障がいのある人と一緒に楽しめるのか、と思っていたけれど、障がい者とか関係なく、楽しかったよ。</p>

	質問	発表者からの回答
3	MLAPPERS の皆さんが活動を楽しまれていることが、持続可能な取組へ高めているのだろうなと思いました。感想です。	うれしいご感想をありがとうございます！ 私たちの楽しさを感じて下さってありがとうございます。
4	非常に興味を持ちました。素晴らしい活動ですね。コロナが収束したら長崎にも来てください。オンラインで動画も見せていただきました。これからもがんばってください。	ありがとうございます！ぜひ、声をかけてください！